

タイトルを見たとき歴史小説と思いましたが、舞台は昭和50年代。推理小説を読むと犯人や結末が気になってしまうので、まず最後を何ページか読んで犯人を見つけてから読むという読み方をしています。今回も例に違わずざっと犯人らしき人を確認して読み始めました

主人公は広告業者につとめていて部署のホープである24歳の村久。彼の考案しプランが採用され、恋人の恵津子とも上手くいていたのに、彼女から一枚の絵を預かった所から事件に巻き込まれてゆきます。恵津子の失踪の手がかりである謎の男性が目の前で何者かに刺され「あすかのみこ」という言葉を残して死んでしまいます。唯一残された絵と「あすかのみこ」という言葉を手掛かりにして彼は謎を突き止めてゆきます。話が進行するうちに彼はどんどん遅しくなるとゆきます。とても小気味よく物語が進み、ドキドキしながらもきつと次はこんな感じで進むんだらうと期待しつつ読めました。(たとえすでに犯人が分かっているでもです)。大まかなところは自分の想像通りの展開でした。最初にあつた伏線もわかりやすくなっていて安心して読める推理小説だなあと思いつつ読んでました。なのに、「ネー！こんなオチなの？」という結末に驚きました。もっと現実的でドラマチックな結末を期待していただけに、自分の予想からあまりにもかけ離れすぎていました。ナマイキ書いてごめんなさい。

N・F・



徳間文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞